

TS転生吹雪何故か儀装が最後の大隊兵士装備

覚醒不知火

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様によつて吹雪にTS転生してしまつた感情が希薄な主人公。深海棲艦を倒すためにに艦装を装備したら。

吹雪の艦装ではなく最後の大隊兵士の装備だった。

そしてなんと深海棲艦を倒した後にその死骸の血を飲み肉を食り食つてしまつた。

さらに戦争行動に対して歓喜を感じてしまう。

吸血鬼化した吹雪による地獄が今始まる。

タイトル少し変えました。

友人が書いてくれました。

Twitter始めました

<https://twitter.com/Kakuseishi>

ranui

目次

キャラ設定

種族？

深海棲艦

突如世界中の海に現れた謎の存在。
通常兵器は、効果がない。

一説には沈んだ船や船員の怨霊なのでは、と言われている。
イロハで識別される一般深海棲艦の他に鬼や姫などの特殊個体が
存在している。

人類特に艦娘を激しく憎んでいる。

艦娘

人類が妖精さんの協力を得て開発した艦装と呼ばれる武器を装備
した少女達の事。

深海棲艦と戦える唯一の戦力であり、適正の有る者は強制的に徴兵
される。

艦装を装備すると元の艦の戦闘能力を扱えるが、人格や語尾に変化
が現れる。

又艦娘は沈むと深海棲艦になるのではないかと言われている。

吸血鬼

圧倒的な身体能力と再生能力を持つている。

生きていく上では血が必ず必要であり、接収しないでいると最悪死
亡する。

血を吸われた者は、その吸血鬼の眷属になる。
経験済みの者はグールになる。

経験していない者は、自我のある吸血鬼になるが主には、逆らえない。
性格は戦争や殺戮行為を楽しむ者が多い。

現時点登場キャラ

主人公 吹雪 本名 伊吹 葉雪

本作の主人公であり交通事故で死亡し神様によつて艦これの世界に転生した。

神様によつて艦装を何もないところから装備可能。

しかし使用できる艦装は吹雪の艦装ではなく最後の大隊兵士の装備だつた。

前世含め生まれつき感情が非常に希薄で喜怒哀楽はしつかりあるものの本気で悲しんだり怒つたり喜んだり出来ない為周りには誤魔化しているが非常に退屈な人生を送つていた。

友達や家族は一応大事に思つていた。

転生してからも問題はないものの退屈な人生を送つていた。

しかし深海棲艦が現れた事によりそれは終わりを迎えた。

最後の大隊兵士の装備を使用し深海棲艦と戦おうとした所今までに感じたことの無かつた感情の高ぶりを感じ更に吸血鬼化した。

それ以降は戦闘の際に感じた感情を更に味わう為に行動しておりそれを邪魔する存在は家族だろうと友人だろうと鬱陶しいと感じている。

また吸血鬼化している為身体能力が高く更に砲弾や銃弾を全て見切る動体視力を備えている。

しかし強烈な渴きや空腹を感じる事が普通の食べ物や飲み物では満たせず人肉や血を飲む事によつて満たされる為殺した深海棲艦の血や肉を食べている。

血は定期的に飲まないと体に異常をきたすため輸血袋をいつも隠

し持つている。

海軍から戦死に見せかけて失踪しようとしている。

基本的に更なる戦争を体験する為に動いている。

最近アハトアハトを手に入れて艦装として使おうとしている。

睦月 本名 睦田 千月

吹雪の初めての友達である。

吹雪の事を大切な友達だと思っている。

戦う事に不安を感じている。

最近は吹雪が何か隠し事をしているのでは無いかと疑っている。

夕立 本名 夕下 小立

睦月の幼馴染であり吹雪の友達もある。

小学生の時に睦月をいじめようとした男子生徒を半殺しにしている。

友達思いのいい子である。

実は何かを殺すこと痛めつけるに快感を感じる。

しかし普段はその感情を抑え込んでいる。

吹雪に憧れと恐怖を感じている。

レ級 本名 なし

瀬戸内海に侵入し訓練航海中の吹雪達を襲った。

その際吹雪に恋している。

人や艦娘を殺すのが大好きで吹雪の為なら深海棲艦も殺す危険人物。

吹雪によつて吸血鬼化。

ヤンデレ気質。

吸血鬼ヲ級 本名 なし

吹雪によつて建造された存在。

吹雪に絶対の忠誠を誓つてゐる。

仕事に忠実で非常に優秀。

少し口数が少ない。

吸血鬼タ級 本名 なし

吹雪によつて建造された存在。

吹雪に絶対の忠誠を誓つてゐる。

殺戮が大好きで目的を忘れる事もある。

海軍提督 伊吹 整一

吹雪の父親であり海軍提督である。

艦娘が配備されていない時期に瀬戸内海を深海棲艦から守つており国民から非常に人気である。

非常に厳格な性格で不正行為は一切働くはずまた実力主義者でコネだけで上に来たものを嫌つてゐる。

妻が吹雪を産んだ直後に死亡してゐる。

厳格な性格だが娘の吹雪には滅茶苦茶甘く海軍の仕事や式典などがあるにも関わらず入学式や授業参観に出席してゐる。

提督として非常に優秀でどんな状況でも冷静に判断し指揮できる。

吹雪にお父さん嫌いと言われた時は部下が本気で心配するほど落ち込んだ。

闇商人 本名 不明

闇市で商売をしており吹雪から深海棲艦の死骸を買い取つたり輸血袋を売つたりした。

長門 本名 不明

吹雪達の教官の一人で艦娘のエース。
実戦経験豊富で戦闘能力が非常に高い。
ロリコンとの噂あり。

陸奥 本名 不明

吹雪達の教官の一人で長門の幼馴染。
長門同様に実戦経験豊富で強い

大淀 本名 不明

吹雪達の教官の一人

叢雲 本名 不明

お嬢様でプライドが高い。

財務大臣

伊吹整一が一番嫌っている人間で汚職をしている。

第一話

僕は、何故かどんなことでも本気で楽しむ事も泣くことも、怒ることもできない。

自分でもどうして周りとこんなに違うのか、まつたく分からなかつた。

物心ついたころにはそだつた。

だけど、何も感じないとゆう訳ではなく、少しだけではあるが喜怒哀楽はちゃんとあつた。

そして僕は、今人生で一番驚いている。

僕は死んだと思われる。

今いるのは、転生物でよくある真っ白な空間。神様が直ぐにでも出てきそうだ。

『ここにちは』

真っ白な空間に声が響く。

声のした方向を向くと若い男性?が立つていた。

「ここにちは」

『普通は驚くのだが驚かないんだな?』

「そんなことよりもここはどこなんですか?」

『死後の世界のまたは神の世界だ』

男は死後の世界、そう言つた。

やはりトラックに引かれたし死んだのか?
一緒にいた家族はどうなったのだろうか?
まあ目の前の神様?に聞けばいいか。

「貴方は神様なんですか?」

『確かに君たちで言うところの神だ』

やつぱり神様だった。

「一緒にいた家族はどうなりましたか?」

『生きてるよ死んだのは君だけだ』

「そうですか」

『さつきから何でそんなに冷静なんだ?』

まあ普通なら混乱したりするだろう。

『普通は驚いたり発狂したり泣き出したりするのだが』

「昔から喜怒哀楽が薄くてあまり驚いたり泣いたりしないんですよ」

『そうかやはり君は特殊だな』

「そうですか」

『前置きはここまでにして本題を話そう』

神様は本題を話し始めた。

『実は君にやつてもらいたい事がある』

「なんですか？」

『実は別の世界に転生して欲しいんだ』

「転生ですか」

転生か：最近の異世界ものみたい、な感じか？
というか、何で転生するんだろうか？

神様に聞いてみるか。

『ちなみに転生する世界は艦これの世界だ』

「そうですか」

『やはり驚かないか』

「それよりもなぜ僕はなぜ転生するんですか？理由が知りたいのですが」

『それは転生した後にわかることだ』

転生する理由は分からなかつたが、転生する世界を教えてくれた。
にしても「艦これ」世界か。

ちなみに僕は、「艦これ」を友達の勧めで、アニメと映画を見てゲームも少しやっていた。

まあ別にいいか。

「いいですよ」

理由は、ただ死ぬよりそつちの方が退屈しないと思つたからだ。

『ありがとう』

神様はそう言つた。

そしてすごい笑顔になつた。

何故そこまで良かつたのか？

分からぬが取り敢えず「いえいえ」と返した。

そういうば、艦これの世界と言つても二次創作が多くて色々な設定があるが、どうゆう世界何だろうか。

それに、いつたい何に転生するのだろうか、提督？それか一般人？もしくは艦娘？

いや艦娘はないだろう僕男だし。

神様に聞いてみよう。

「いつたい何に転生するんですか？」

『駆逐艦吹雪だよ』

は？

意味が分からぬ。

つまり女の子になれとゆうことか？

別に問題はないが理由くらいは聞いておきたい。

『なんで性転換を』

『それじやあいつてらつしゃい』

有無を言わざず転生させられた。

そして僕の視界はブラックアウトした。

転生してから7年経つた。

私の名前は伊吹 葉雪（いぶき はゆき）

『もしかしたら男かも』なんて期待は、赤ん坊の時におしめを替えられた時に碎け散つた。

転生してからずいぶん経つたが、やはり女の子の身体は慣れないことが多い。

そして、今は小学校の入学式である。

入学式に両親は来ていない。別に親に嫌われているとかではなく、母親は産まれて直ぐに亡くなり、父親は海軍のお偉いさんなので軍の式典で遅れるが絶対来ると言っていた。

片親だが家庭環境は非常に良かつた。

しかし、父親の溺愛具合がやばかつた。

過保護だし、何かが出来る様になると途端に喜んだ。

行事や誕生日を欠かした事は今まで一度も無い。

今回も遅れはするが、「絶対に行く」と言つていた。

「はあー」

溜息を吐いた。

そんなに一人娘が可愛いかねー。

この体は吹雪の体だけあつて可愛いし、小さい時からトレーニング

をしていたので体力もある、運動神経もかなりいい。

ただ気になるのは、艦これの世界なのに深海棲艦がないことだ。

そのうち現れるとと思うが、艦娘も登場するのだろうか。

あと、何故か歯が牙みたいに尖つて来ている。

吹雪つて歯尖つてたつけ？

転生してから15年の時が過ぎた今は中3だ。

女の子っぽい喋り方や仕草は自然と身についたし身体も慣れた。

友達も出来た。

今はその友達と海に来ている。

「葉雪ちゃん何してるの早くいくよ！」

今言葉を発したのは、睦田 千月 むつた ちづき

今世初の友達だ。

入学式の時に話しかけてきて、そこからずっと友達だ。

誰にでも優しく友達思いである。

「ごめん少し考え方してた」

「早くいくっぽい」

今の特徴的な語尾の子は、夕下 小立 ゆうした こだち

千月の幼馴染であり、千月と友達になつた時に同じく友達になつた。

語尾が特徴的では、あるが友達思いの優しい子である。

そして喧嘩が物凄く強く、千月をいじめようとした奴を病院送りにした。

その時の姿はさながら鬼である。

完全に睦月と夕立だ。

海に遊びに来ている理由は、小立が行きたいと言ったからだ。
三人だけで行くことに、休暇中の父親が滅茶苦茶反対したが、「お父さん嫌い」で黙らした。

あの父親を二人見せたくないからな。
近所だからそこまで心配するか?と思うが親とはそうゆうものなのだろう。

「小立ちゃん何する?」

「泳ぐっぽい」

「葉雪ちゃんは?」

「私は何でもいいよ」

「じゃあ泳ぐので決まりっぽい」

「うんそうしよう」

そして三人で泳ぎはじめる。

二人には父親が反対したことは一切伝えていない。
二人共楽しそうに泳いでいる。

流石に夏休みだからか人が多い。

二人共迷子にならないか心配である。

「私は先に上がってるね」

「分かった」

「分かつたぽい」

二人より先に上がつてビーチで待つていると何か嫌な予感がする。気のせいだろうか？

岩場のほうを見ると、小さい何かが岩場の影に走っていた。
気になるので追いかけて見ようと岩の後ろを覗いた。

そして私は珍しく少し驚いた、そこには数十センチほどしか身長がない、「何かが」いた。

私は即座に理解した、妖精さんである。

何故妖精さんが存在しているのかは、艦これの世界だとゆうことを考えればわかる。

だが、なぜ今ここに居るのかが理解出来ない。
不安がより一層に強くなる。

そして次の瞬間

「なんだあれ？」

「人が海に立つてる？」

海の上に黒い人のようなものが立っている。

「小立ちちゃんあれなんだと思う？」

「分からないつぽい」

そのビーチにいた全員がそれに注目した。

そして、私だけはそれが何か理解できた。

深海棲艦が遂に現れた。

ここから始まるのは、虐殺だ。

二人をどうにかして逃がせないか考える。

しかし深海棲艦は時間を与えてくれなかつた。

深海棲艦は、砲撃を開始した。

一瞬で海とビーチは阿鼻叫喚、人々が悲鳴を上げている。
我先にと逃げ出し始めた。

転んで圧死する者、砲撃に当たつて粉々になる者、四肢が無くなつた者、溺れる者と正に地獄。

額から冷汗がである。

二人は無事なのか分からぬ。

警察や海上保安庁に連絡している人も居るが、通常兵器は深海棲艦に効くか分からぬし、とにかく時間が無い。
しかもまだ艦娘はいない。

なれる人はいるかもしぬが艦装が無い。

幸いにも二人を目視で確認できた。

小立ちゃんと千月ちゃんは、手を繋いで一緒に逃げながら私を探しているようだ。

一先ず無事と分かつて安心した。

ほつと胸をなでおろす。

妖精さんが岩陰からぞろぞろと出てくる。
そして体をよじ登つて頭まで上つてきた。

何故かと困惑していると、頭の中に情報が流れ込んできた。

強烈な頭痛と共に頭に流れ込んでくる情報は、ものすごいスピードで脳に刻まれて行つた。

数十秒間の頭痛の末に、全ての情報が刻まれた。

その情報は神様からのメッセージと戦い方、そして艦装の展開方法だつた。

神様からのメッセージによると、転生特典で私は艦装を外部から取り付けずに、自分の意志で出したり、しまつたりできるようだ。

若干驚いたが、これでの深海棲艦を倒すことが出来る。

精神を安定させてから、引き出すように艦装を展開する。艦装を展開し終え、自分の姿を海面で確認する。それを見て驚愕する。

吹雪の艦装を纏っていると思っていた。

とゆうか確信していた。

しかしそれは違っていた、だからこそあまり驚かない私でも驚愕する。

私が身に付けている艦装は、吹雪のとおり、そもそも艦娘の艦装ではなかつた。

今つけている艦装（とゆうより装備）は、黒いロングコートにドイツ軍のヘルメット、そして弾薬が入っているバックパック、腕に巻かれている鍵十字の腕章。

武装も、右手にM P 40、腰にルガーポ8、背中にパンツアーファウストやK a r 9 8 k、他にも手榴弾、スコップ、コートの中にはナイフが装備してある。

私はこの装備を見た事がある。

それは、前世で好きだつたHELLSINGという漫画に出てくる

る。

狂った少佐率いる約1000人の人造吸血鬼の兵士達によつて構成された、

ナチス最後の大隊ラストバタリオン。

その兵士達の装備である。

驚いたし色々考えたい、しかし時間が無い。

私は鍵十字の紋章だけをしまい、スカーフで目元以外を隠した。

私は海を走つて戦場に向かつた。

第二話

私は今深海棲艦に向かつて海上を走つてゐる。

深海棲艦は、リ級1、ホ級2、イ級3の6隻。

対してこちらは私一人。勝てるかわからない、死ぬかもしない、攻撃が効くかもわからない。

普通は戦わないだろう。

だけど私は今、前世でも今世でも感じられなかつた、感情の高ぶりを感じていた。

初めての感覚だつた。

体が熱いし、口元も自然とやけてしまふ。

手にKar98kを持ち、深海棲艦に向ける。

ホ級の頭をよく狙い引き金を引く。

バン！

と大きな音が響く。

そして銃弾が硝煙と共に打ち出され、ホ級の頭を撃ち抜いた。

他の深海棲艦が啞然としている隙に、スコッップに持ち替えイ級に物凄い速さで近づいて頭から勝ち割る。

我に返つた深海棲艦たちが砲撃をするが、高速で動いて全て回避する。

MP40に武器を持ち替えて残りのイ級を銃撃する。

高速の弾丸が残りのイ級を全て貫き海の底へ沈めた。

ホ級がまた砲撃してくるが、全てかわし手榴弾を投げ、銃弾を当て爆発させる。

爆発の煙が晴れると全身ボロボロの大破したホ級が出て來た。

MP40を乱射して止めをさす。

残つたり級に目をやると、リ級が怯えて海上に尻餅を着いた。高速で接近して眉間に銃弾を打ち込んだ。

振り返つて見れば一分足らずで深海棲艦を殲滅してしまった。

戦闘中に感じていたのは正義感でも罪悪感でもなく、高揚と歓喜であつた。

敵を撃ち殺した時、切り殺した時は、特に心から楽しめた。

自分でも驚くほどに、今まで全くなかつた感情の起伏を感じた。

そして今、何故か物凄い渴きと空腹感を感じていた。

ふと、血を流しながら浮いているリ級の死体に目をやる。

死体が、血が、只々美味しそうに見えた。

理性的な部分がやめろと言つてはいる、けれど氣付いた時には口元のスカーフを外し、リ級の首に歯を突き立っていた。

そして血を飲み肉を貪つていた。

リ級の腹からは内臓が飛び出し体の所々が千切れている。

普通なら嘔吐するような状況だが、それは無性に美味しかつた。

粗方食べ終わつた後には、先ほどまで激しく押し寄せていた渴きと空腹は、なぜか感じなくなつた。

後に残つたのは血や内臓が飛び散り無残な姿になつたり級と、他の深海棲艦の残骸、ビーチにある大量の死体だけだつた。

あれから一月が経つた。

どうやら深海棲艦は、世界各地の海に出現して船舶を攻撃シーレーンを分断した。

勿論各国は海軍や空軍は使つて攻撃したが、深海棲艦に通常兵器の類はかすり傷程度のダメージしか与えられず、日本も内海を守るのがやつとだつた。

その結果、日本の食料事情は急速に悪化、政府によつて食料は配給制になり農地の開拓が始まられた。

そして、つい最近軍は（といふかお父さんが）会見で、昔に沈んだ軍艦の戦闘力を持ち、深海棲艦と対等に渡り合える装備である「艦装」の開発に成功した発表した。

同時に、それを扱えるのは十代から三十代の一部の女性のみであ

り、適性検査を各地で行うことを公表した。

私は今家で検査に行く準備をしている。

前の戦闘の後陸に戻り艦装を解いた。

を探していた千月ちゃんと合流して、救助に来ていた軍に保護して貰った。

避難所に着いた途端に、お父さんに泣きながら抱き着かれた。

あれ以降、渴きや空腹を感じる事が殆ど無くなり、また心から何かを感じる事が出来なくなってしまった。

気になつて自分の顔を鏡で見て自みると、歯の殆どが牙の様になり目も濁り何処か焦点が合っていない。

自分が吸血鬼の様になりつつあるのを自覚する。

なぜか全く悪い気はせず、寧ろ何処か心地良さを感じる事が出来ている。

まあそれはいいとして、準備が出来たから行かないと…。

「行つてきまーす」

「行つてらっしゃいませ」

家政婦さんに行つてきますを言つた後に扉を開けて家の前に止まっている車に乗り込む。

「お願ひしますね」

「お任せください」

運転手で護衛の軍服を着ている人がそう言うと車を動かし始める。

どうしてこの様な事になつているか…。

深海棲艦の出現以降、治安が急速に悪化しているため、暗殺や拉致などを阻止するために将官以上の軍人や政治家、その家族には護衛を付けることになつていた。

正直言つて要らないので「必要ないです」と、言おうと思つてたら、それをあの過保護な父が許すはずもなく、父が厳選に厳選を重ねた自分の部下を護衛として送つて來た。

二十分ほどで検査場に着き、私は列に並び護衛の人は車で待つている。

遠くを見ると千月ちゃんと小立ちちゃんが一緒に並んでいるのが見える。

二人も来てたのか、他にも三百人位の人が別々の列に並んでいる。この中で適性があるのは何人位なのか…まあ三人は確定だけど。

少し経つて私の番になり「どうぞ」という声を聞き、部屋に入る。部屋には特別機械の様な物は無く、机と椅子があるだけの殺風景な部屋だった。

軍人が二人程いて、一人は奥の椅子に座り恐らく結果をノートに記していた。

もう一人は女性で、手前の椅子に座り無表情にこちらを見ていた。そんな殺風景な部屋に一か所だけ異質な空間がある。

妖精さんが机の上に立っていた。

「貴方はこれが見えますか？」

妖精さんを指さしながらそう言う。

私は迷わず。

「はい見えます」

そう言うと軍人の人が喜んだように見えた。

「確かに見えるんですね？」

「はい確かに見えます」

「では、どの様な物が見えていますか？」

「二頭身の可愛い何かが見えます」

幾つか質問を答えた後に「ありがとうございます」と言つてきた。

これで終わりだろうか。

「最後に名前をお願いします」

「伊吹葉雪です」

名前を言うといきなり軍人の人が慌てだした。

「もしかして伊吹整一大将の娘さんですか！」

「はい確かに私の父は伊吹整一ですが」

「本当ですか！」

「はい」

「いやあ実は私伊吹大将を尊敬しております！」

二十位の質問責めの後、ようやく解放された。

聞いていてわかつたけど、どうやらお父さんは瀬戸内海を守った英

雄らしい。

お父さん凄いな。

第三話

私は今廃墟となつた海岸にいる。

深海棲艦が出現して以降、海岸に住む人々は内陸に移住し、海岸は廃墟と軍の施設が存在するのみだつた。

なぜ私がこんな所に来ているのか、それは三日前に来た「ある手紙」だつた。

検査に行つた時点で察していたが、赤紙だつた。

内容は

艦娘適性があつた為一か月後に迎えを送る。

逃亡した場合罪に問われる。

吹雪の適正があること。

これは大変名誉な事である。

少尉として任官する。

身辺整理をすること。

外部に漏らさないこと。

家族への配給量が増えること。

などである。

一ヶ月の猶予は、家族との時間や心を落ち着かせたり、やり残しがない様にとのことだろう。

まあ、私はそんなことをするつもりはないが…。

お父さんは海軍で忙しいし、千月ちゃんと小立ちゃんは、心の準備や家族との時間が必要だろう。

そして深海棲艦を殺す為、私は今海岸に来ている。心を落ち着かせて艦装を展開する。

あの時と同じ『最後の大隊兵士』の装備が展開される。

服の色んな所を開けたり動かしたりしてみる。

二回目だが、この服は着ていると謎の安心感を感じる事が出来る。全く関係ない事だが思い返してみれば、ヘルシングだとパンツアーシュレックを持つて『最後の大隊兵士』がいたが、この艦装には無いのだろうか。

そう思つていると右手が光り始めた。

一瞬「何だ?」と思つたが、気づけば右手には大きなパンツアーシュレックが握られていた。

暫く色々調べたところ、私はどうやら『最後の大隊兵士』が持つていた装備なら何でも展開できるらしい。

ただ銃火器は一つずつしか出せなかつた。

しかしM24型柄付手榴弾だけは無限に出せた。

まあいい、それよりもあの時の歓喜を、あの時の高揚感をまた味わいたい。

早く海に出て深海棲艦を殺ろう。

そう思い海を走る。

今更ながら、何で滑るんじやなくて走つているんだ?

そんなことを考えながら探索していると、遠くに黒い影を発見した。

見つけた。

ヌ級一隻、ネ級一隻、チ級一隻、イ級三隻、

少しずつ口角が上がつてくる。

感情も歓喜を心の底から伝えてくる、喉の渴きと空腹感も同時に感じた

敵はこちらに気づいていない。

ああ、早く殺したい、だけど今回は趣向を変えよう。

深海棲艦の彼女達は、警戒しながら海域の哨戒を行つていた。

そんな中の一隻であるチ級が最後尾を進んでいた。

チ級は強力な雷装を持っており、それを武器に大量の艦艇を沈めて

きた。

また、一部の既に配備されていた艦娘に取つても脅威であり、雷装を使用する前に砲撃で優先的に撃沈するほどの深海棲艦である。

だが今は彼女の背後に悪魔が近づいていた。

彼女は首に強烈な痛みが突き抜けるのと同時に、己の力が抜けて行くのを感じた。

「ギャア——————」

思わず叫び声を上げる。

叫び声に気づいた他の深海棲艦がチ級を見た。

その首には悪魔が噛みつき血を吸っていた。

私はこつそりと深海棲艦に近づき、最後尾にいたチ級の首を噛み切った。

やつぱり血は美味しい、喉が潤った。

深海棲艦達は怯えつつも砲撃を開始する。

しかし全て躱し、イ級を踏みつけヌ級に接近する。

ヌ級は艦載機を発艦させようとしたがその前に腕でその身体を引きちぎった。

内臓や血がドバドバと海に落ち、海を無常に赤く染めていく。隙についてイ級は魚雷を撃ち砲撃をして来る。

しかし先程と同じく全て躱し、お返しに魚雷を一本拾い上げ。イ級の口に投げた。

吸血鬼の身体能力で投げられた魚雷は物凄いスピードでイ級に命中する。

それは思いのほか豪快に周りのイ級を巻き込んで大爆発を引き起

こした。

残つたネ級は恐怖を感じながら狂つた様に砲撃をしてくるが、全て躲す。

砲撃をよけながらどの様に殺すか考える。

そして頭にいい考えが浮かび不敵な笑みを浮かべた。

浮かんだアイディアはすぐに実行にうつされる。素早く右手にパンツァーシュレックを開き、ネ級に向ける。

パンツァーシュレックは本来対戦車兵器であり、二人で止まつて使うのが一般的である。

しかし私は吸血鬼の身体能力により、一人でしかも動きながら狙いを定められる。

ネ級はパンツァーシュレックを撃たせまいと、死に物狂いで砲撃するが全て躲され無慈悲にも弾頭が放たれた。

弾頭はネ級に命中し粉々に爆散した。

四肢が海上に散乱して更に海が血で汚れた。

吹雪は海上に散乱する死体を満足するまで食べた。

静まり返つた海は真っ赤に染まり、所々に人体が散乱している。

夕闇がせまるなか、沈みゆく太陽の赤はまさに血の赤となり、この世のものとは到底思えない、まさに地獄さながらの情景が赤々と照らされていた。

第四話

赤紙が来てから三週間が経ち、迎えが来るまで後一週間になつた。

私は今深海棲艦の死骸を持つて闇市に来ている。
なぜこんな所に居るかと。いうと。

私は三週間の間何回も海に出て深海棲艦を殺した。
護衛の人を欺くのは、大変だつたけどその分歓喜と血を味わえた。
しかし深海棲艦を殺している時に気がついた。

軍に入つてしまふと今までみたいに自由に楽しめないし血も肉も
食べられない事に。

これは困つた。

赤紙は拒否出来ないし、父を頼ることも厳しい。

そして私は思い浮かんだ。

軍に入つた後戦死に見せかけて失踪すれいいと。

だがこの案は一つ問題がある。

それは戸籍を失うし帰る場所もお金も無くなること。

これは大問題だ。

いくら私でも家が無くなつたりお金が無くなると生活が出来なくなる。
どうやつたら問題を解決できるかと家でテレビを見ながら考えて

いると。

政府の発表で面白いものを見た。

いわく深海棲艦の体の一部や死骸を見つけたら政府が高値で買う
と言うものだ。

そして私は思つた。

これなら失踪した後の資金を調達出来ると。

しかしが私みたいな未成年しかも海軍提督の娘が深海棲艦の死骸

を持つてきいたら不自然だろう。

理由も聞かれるだろうし海に行つたと言う事がばれる。

だがここでまたいい案が浮かんだ。

「なら闇市を経由すればいい」と。

闇市とは深海棲艦の出現によつて食料事情が悪化し治安が低下したことにより出来た市場だ。

闇市は麻薬や武器の密造ほかにも犯罪者の隠れ蓑、禁制品の取引などに使わている。

というわけで私は艦装を部分的に展開してロングコートとヘルメットあと今まで使用してこなかつたガスマスクを装着しイ級の死骸をバックに詰め闇市に来ている。
ヘルメットにガスマスク姿は普通ならばかなり浮いた格好だが闇市ではあまり浮かない、理由は殆どの人が顔を何かで隠しているからだ。

闇市とは犯罪の温床だ。

身バレを防ぐ為に顔を隠さない方が不自然と言えるだろう。

だがまあ私は背がまだ小さい。
故に

「おいガキてめえみたいなのが何で闇市に来てんだ?」

「お前みたいなのが来るところじゃねえぞ」

「まあいい命が欲しけりや金目の物全部おいてつて貰おうか」

なめられて変なのに絡まれ易い。
非常にめんどくさい。

しかし

「人間も食べてみるか」

「はあ？お前何言つて、ぐはつ！」

「おいてめえ何、ぐふつ！」

コンバットナイフでチンピラ二人の頸動脈を斬る。

闇市では弱肉強食、行政や警察の目には入らないだからこそ闇市では日常的に殺人事件が起ころ。

だからこそ初めて人間の血や肉を食べられる。

チンピラ二人の死体を路地裏に引きずつっていく。

一時間後

食い散らかしておいてなんだが深海棲艦の方が美味しいはこれ。別にまずくはないが、深海棲艦の方が美味しい。
もしかしたら個体差があるのかもしれないが。

そうして私は、血が壁に飛び散り肉片が所々に落ちている凄惨な路地裏を後にした。

数十分歩き闇商人の下に辿り着いた

「これを売りたいのだが」

「これは深海棲艦の死骸か」

「いくらで買い取つてくれる？」

「まあ二十五万つてところだな」

深海棲艦の死骸は政府によつて誤差はあれど大体五十万で買い取られる。

半分は手数料と言つたところだらうか。

「手数料が半分か」

「嫌なら買い取らねえぞ」

「じゃあこうしよう私は定期的にここに深海棲艦の死骸を売りに来る、だから三十万で買い取つてくれ」

「まあいいだろ、だが三十万は三回目以降だ」

「分かつた」

「ほれ二十五万だ」

「ありがとう」

取引が終了し私は闇市を後にした。

第五話

闇市に行つてから一週間経ち軍の迎えが来た。

「私が鎮守府までお送り致します」

「はい、よろしくお願ひします」

「では車にお乗りください」

車に乗った後色々説明を受けた。

鎮守府着いてから二週間は訓練に専念してそれから実践らしい。
二週間しか訓練期間がないことから余裕のなさが感じ取れる。

他にも艦娘適性者は全国で百人以上見つかっているがまだまだ数
が足りないらしい。

配備された艦娘も練度が足りていらないらしく危うく轟沈しかける
者が後を絶たないそうだ。

私は失踪するから関係ないけどね。

ただ軍にいる間は本性を表さない様にしないといけない、濁り切つ
た目は闇市で買ったカラーコンタクトで隠しているが、牙は隠しよう
がないから出来るだけ口を見せないようにしゃべるしかない。

私の本性を知られる訳には絶対にいかない。

暫くして車が鎮守府に着いた。

周りを見渡すと他にも艦娘適性者を乗せた車が来ている。
車を降りてすぐに声が聞こえた。

「あ！葉雪ちゃん」

千月ちゃんと小立ちゃんだった。

「葉雪ちゃんも適性者だつたんだ」

「うん千月ちゃん達も艦娘適性者だつたんつだね」

「ビックリだつたぽい！」

「これで艦娘になつてからも三人一緒だね！」

「そうだね」

正直言つて鬱陶しい。

吸血鬼化する前なら大事な友達だつたけど今となつては、ただ歓喜を感じる上で邪魔な存在だ。

戦死を偽装しようとした所に助けにでも来られたら正直言つて面倒だ。

そんなことを考えていたら女の人の声が聞こえた

「私は教官の大淀です、これから皆さんの艦装がある場所に向かいます、ついてきてください」

皆が声を発した教官に着していく。

しばらく歩くとかなり大きい倉庫が見えてきた。

倉庫に入ると艦これでよく見る色々な艦装が置いてあつた。

「皆さんこれが艦装です」

色々な艦装が綺麗に整備された状態で並べられている。

「早速装備と行きたいところですが、まずはあちらの更衣室で各自のロッカーに入っている制服に着替えて下さい」

更衣室に入りロッカーを確認すると吹雪型の制服が置いてあった。すぐに着替えて更衣室を出る。

「皆さん着替え終わりましたね」

アニメやゲームで見た艦娘達が整列している。

「事前に知らされていると思いますが皆さんは色々な艦種、艦型に分かれています、自分の適正艦の艦装を身に着けてみて下さい」

言われたとおり吹雪の艦装の所まで歩を進める。

「これが」

「強そうね！」

初めに何人かが艦装を装着する。

私も吹雪の艦装を装着してみる。

頭に艦娘としての戦い方が流れ込んでくる。

使えるか少し不安だつたがどうやら問題ないようだ。

「皆さん立派ですよ」

正直言つて艦装を着けているといつもの艦装と違つて動きにくくし、頭に流れ込んで来た戦闘方法もいつもと比べて戦いにくそうだ。

「これから皆さんには水上移動訓練を行つてまらいます」

全員が偽装を装着した所で教官が訓練の指示を出した。

「それとこれから皆さんをお互いを艦の名前で呼んでください、分かりましたね？それでは訓練場に移動します」

訓練場はかなり大きいプールだった。

「それでは皆さん水面に足をつけてください」

皆躊躇しているが私は慣れているから躊躇なく足をつける。
そして軽く滑つてみる。

やつぱり普通の艦装だと走るんじやなくて滑るんだな。

「はゆじやなくて吹雪ちゃん凄い」

「負けてられないっぽい」

私に続いて全員が水上に立ち滑り始める。

「皆さん今日はこのくらいでいいでしよう」

二時間経過した所で訓練は終了した。

「吹雪ちゃん！」

「なに？」

「ちょっと上手く滑るコツを教えて欲しいんだけど？」

「それなら、う・・・」

「どうしたの?」

ああ頭が痛い。

私は吸血鬼になつてから定期的に血を飲まないと強烈な渴きと共に体が何かしらの異常をきたすのだ。

「ちよつと待つてて」

私は急いでトイレに駆け込んだ。

すぐに服の下に隠していた輸血袋に入つた血を吸う。
次第に喉が潤い頭痛が収まる。

ちなみに輸血袋は闇市で買った。
闇市は本当に何でも揃う。

第六話

鎮守府に来てから一週間が経った。

射撃訓練、陣形訓練、救護訓練色々やつた。

夜に何回か抜け出して輸血袋を買いに行つたりしたが基本的には、
ばれなかつた。

ただ一回だけ睦月ちゃんにばれそうになつた。
咄嗟に嘘をついたが正直言つて危なかつた。

今は艦隊で航海訓練に出ている。

呉から大阪にフル装備で行く訓練だ。

艦隊の艦娘は私を含めて六人。
まず旗艦であり教官の長門。

同じく教官の陸奥。

ゲーム道理お嬢様でプライドが高くツンデレ気味な叢雲。
そして私と睦月それから夕立。

「皆訓練とは言え氣を抜くな」

「分かりました」

「分かつたポイ」

「分かつたわ」

長門は実戦経験豊富な艦娘だ。

私たちよりも数か月早く海に出て深海棲艦を倒している。

「皆さん初めての長距離航海です、深海棲艦は来なくとも衝突など氣

を付けて下さい」

陸奥も長門と同じで実戦経験が豊富で頼りになる艦娘である。因みに長門の幼馴染らしい。

「吹雪ちゃん、大丈夫かな？」

「大丈夫だつて、ここは内海だよ」

「吹雪ちゃんの言う通りっぽい」

そういうことは瀬戸内海入つてこようとする深海棲艦は基本的に紀伊水道か豊後水道で艦娘に迎撃される。非常に退屈だ。

その時突然警報が鳴り響いた。

ブーー！ブーー！ブーー！

「警報だ！」

「なになに！」

「全員周囲を警戒しろ！」

長門の命令で全員が周囲を警戒する。

ピーピー

「おい司令部何が起きた！」

『深海棲艦の一部が紀伊水道を突破してそちらに向かっています』

「深海棲艦の編成は？」

『レ級一、ル級二、ヲ級一、ツ級二、イ級多数です』

「大艦隊じゃないか！」

『今援軍を送りますのですぐ・・・』

「おい司令部どうした司令部！」

『ズ・ズズ・・・・』

「ちつ通信妨害か」

これは楽しくなりそうだ。

何なら私以外が全滅すれば失踪出来そうだ。

「全員急いで鎮守府まで戻るぞ！」

「「「はい」」」

「敵機！確認！」

「くそ、全員対空戦闘開始！」

全員で対空戦闘をする。

いいぞいつもの艦装は使えないがやっぱり戦争は楽しい。

そこから移動しながら対空戦闘をしていく。

十数分戦い損傷艦は、いないがみんなに疲れの色が見えてきた。
まあ私は吸血鬼なので余り疲れないしどちらかと言うと歓喜の表情を見せない様にするのが大変だつた。

ん？これは

「長門これは！」

「こんな時に霧か！」

「みんな離れない様に」

「分かりました」

「分かつたわ」

「おい吹雪と夕立はどこに行つた！」

「見当たらないわ」

「そんな吹雪ちゃん夕立ちゃん……」

よし霧が偶然出てくれて助かった。

後は…

「吹雪ちゃん！」

「夕立ちちゃん…」

なんでいるんだよ！

「吹雪ちゃんもみんなとはぐれたっぽい？」

「なんだよね・・」

くそ、夕立がいるとなるといつもの艦装が使えないし失踪も出来ない。

「一緒にみんなと合流するっぽい」

「そうだね」

まあいい少しイライラするが機会はまたあるだろう。

「それじゃあ」

ヒューン

ドン！

近くに砲弾が着弾した。

そして霧の奥から禍々しい艦隊が出て來た。

「深海棲艦！」

艦隊の中央にはゲームで非常に人気だつたレ級が不敵な笑みをしていた。

「カンムスミツケタ」

よし鬱憤をこいつらで晴らそう。

「シズメ」

「それじゃあ楽しませてくれ」

言葉と共に私はル級に一瞬で近づきその首を噛み切った。

「ハ？」

レ級が啞然とする。

そのままに他の深海棲艦を倒しに行く。

ヲ級に主砲を撃ち、牽制してから接近し手刀で真つ二つにする。イ級が砲撃してくるが魚雷を撃つて黙らせる。

更に二隻のツ級の懷に入り片方の胸を貫く。

もう一隻のツ級を殺そうとしていると残ったル級が砲撃をして来る。

だが全て躊躇級に接近する。

ル級は死に物狂いで砲撃してくるが手刀で首を落とす。

残りイ級が突っ込んできてツ級がそれを援護しているが主砲と魚雷でツ級を黙らせイ級を掃討する。

そんな光景を二隻の深海棲艦と艦娘が見ていた。

片方はレ級彼女は、仲間がやられていく様を啞然としたいや恍惚とした表情で見つめていた。

レ級は今まで感じたことのない恋と言う感情に支配されていた。

彼女は恋をしたのだ吹雪と言う化け物に。

その仲間を殺している表情にその仲間の殺し方にその戦い方に彼女レ級は恋をしてしまった。

そしてもう一隻夕立彼女は吹雪に憧れと吹雪そして自分自身への

恐怖を感じていた。

彼女には家族や友人に言つていらない感情があつた。

彼女は何かを殺す行為何かを痛めつける行為に快感を感じていた。

しかし彼女は通常の倫理観や感情も持つていたためその行為を行わない様にしましたその感情を封印して来たが、敵を楽しそうに殺す吹雪に憧れそんな自分に恐怖した。

楽しかつた。

粗方殺し後はレ級だけか。

「後はお前だけだな」

レ級と向き合う。

「アツ、エット」

何でこいつこんな恥ずかしそうにしてるんだ?

「おいお前」

「マ、マタアイマショウ!」

「あつ」

逃げたか、まあいい。

しかしいつもの艦装じやないから幾らか動きが遅かつたな。

「あの、吹雪ちゃん」

あ、夕立居るの忘れてた。

「夕立ちやんこの事黙つてくれるかな」

「分かったポイ・・」

少し脅す感じになつたな。

まあ黙つてくれるなら問題ない。

だけどこの返り血どうするか。

吹雪は深海棲艦の血で真っ赤に染まっていた。

第七話

艦が火に包まれている。

乗員たちが、必死に火を消し負傷者を運び出している。

しかし敵の砲弾が命中し消化作業が進まない。

医務室は負傷者で溢れかえり、死体は通路に放置されている。

そして弾薬庫に火が回り、駆逐艦は爆沈した。

場面が変わり今度は町がロンドンが燃えている。

上空には巨大な飛行船がおり吸血鬼達を投下していた。

吸血鬼達は各地に火を付け住民達を手当たり次第に殺している。

上空から見れば火によつて巨大なハーケンクロイツが描かれてい
た。

そして吸血鬼達によつてグールとなつた住民が別の住民を捕食し
警察官達がグールに抵抗しているが上から降りてきた吸血鬼によつ
て皆殺しにされた。

どちらも常人が観たら地獄と呼び觀るのをやめたくなる光景だが、
この光景を觀てゐる私は混ざりたいと思つていた。

火に飲まれてみたい虐殺をしてみたい敵を殺したい。

そんな感情を私は感じていた。

パー・パ・ツ・パ　パー・パ・ツ・パ　パー・パ・ツ・パ　パ・ツ・パ・パ！

「つ！」

起床ラッパで目が覚める。

すぐにベットから起き布団を整える。

「点呼！」

「一！」

「二！」

「三！」

点呼に元気よく答える。

軍に入つた為起床は絶対に六時。

吸血鬼の私には関係ないが普通の子には少し辛いだろう。

「〇六二〇に食事だ、遅刻しない様に」

「「はい！」

点呼に来た長門は、直ぐほかの部屋に点呼しに行つた。

「二人も夢・・見た？」

「うん見たよ」

「見たっぽい」

艦娘になると夢で艦の記憶を見る事がある。

特に轟沈する瞬間は絶対に見るようで夢に苦しめられる艦娘も少なくない。

しかしその夢によつて人格に変化が起ころうで夢を見れば見る程人格と性能が元の艦に近づく。

証拠として行き成り会話に語尾を付けだしたり姉妹艦を本気で姉妹のように思つたりする現象が各地で報告されている。

私も夢を見るようになつたが、一緒に見るロンドンの夢のせいか影

響はない。

「準備しよつか」

「うん」

各々着替えをしたり顔を洗つたりしている。

私はトイレに行き輸血袋の血液を飲む。

普通の食事は食べなくても余り問題ないが血は飲める時に飲んで置かないと生活に支障をきたす。

時間になり三人で食堂に向かう。

食堂では、給料艦間宮によつて非常に美味しく又戦時下の一般国民よりかなりいいものが食べられる。

艦娘を政府が大事な戦力と思っている証拠だろう。

食堂に着き券売機で券を買い提出する。

暫くして自分の名前がテレビに表示され食事を取に行く。

「吹雪ちゃん又うどん?」

「え、 そうだけど?」

「いい加減同じ物食べるのやめれば」

「そうかな」

食堂ではいつも同じ物を食べている。

正直言つて何を食べても基本同じなので特に変える様な事は無い。

たまには、変えた方がいいのかな。

「そう言えば、はぐれた時二人は深海棲艦をどうやって倒したの？」

深海棲艦を倒した時と言うのは、練習航海の時の話だ。
返り血を誤魔化す為に長門には瀕死のイ級がやつて来てそれを倒してその血が付いたと報告した。

「どうつて、すごい近づいて来たからそれを狙つて撃つただけだよ」

「だけつて私なら多分動けてないなー」

「睦月ちゃんも撃てると私は思うけど」

「そうかなー、そう言えば夕立ちゃんはどう？」

「私は・・・」

「お前たちもう直ぐ勉学と訓練の時間だ直ぐに食え」

「睦月ちゃん急いで」

「うん」

危なかつた。

夕立は今隠してこそいるがいつかばらすかもしれないからな。

艦娘の改に關する勉学と訓練が終わりみんなが寝たころ私は、いつもの様に艦装で海を走っていた。

海を走る理由は闇市に最短で行くには海を走るのが近道なのだ。

「ん？ あれは」

水平線の向こうに何か黄色い光が見えた。

基本海に民間船は居ない深海棲艦に攻撃される危険性があるからだ。

と言う事は、深海棲艦か軍の船だ。

しかしあの光は軍の船にしては小さい。

つまり深海棲艦の可能性が高い。

「殺るか」

深海棲艦なら殺して楽しむだけだ。

「あれは、レ級 f-l-a-g-s-h-i-p か」

恐らく前に逃がした奴だろう。

今度こそ殺してやる。

私は全速力で走り出す。

レ級がこちらにきづいたようだが砲撃する暇はない。

そして私が手刀で首を跳ねかけた所でレ級が

「ダイスキデスズツトイツシヨニイテクダサイ！」

頭を下げる思春期男子の様に顔を赤くしながら告白してきた。

「へ？」

意味が分からぬ何故レ級が私を好きになるんだ。

私は艦娘を殺してないし何ならレ級の仲間を殺してるんだぞ。

いつたいなぜ。

私が啞然としていると。

「アナタノコロシカタアナタノワライカタナニカラナニマデゼンブス
キデス！」

「成程・・」

いや待てよこれもしかして利用できるのでは。

「ずっと一緒に居たら何でも言う事を聞いてくれる?」

「ハイ!」

これはいい思つたより早く失踪出来そうだ。

「ならずつと一緒に居てあげるよ」

「！」

これからが楽しみだ。

第八話

国防省三階最高会議室

今日この場所で重要な会議が執り行われていた。

「ですから艦娘による日本近海の奪還作戦はまだ練度不足で難しいと言っているでしょう！」

「しかしそろそろ反攻作戦をやつて頂かないと国民の不満が爆発してしまいます」

「それはあなた方が、更に重税をかけたからでしょうが！」

「軍資金確保の為にも重税は、必要な措置です」

会議室では、初老の財務大臣と海軍長官が激論を交わしていた。

「まあまあ、御二人共そう声を荒げずに」

二人をなだめている中年の男性は陸軍長官。

「やるやらないでは無く出来るのか出来ないのかが問題だ」

「総理の言う通りです」

結論をまとめようとしている立派な髭の老人は、総理大臣である。その総理に同調したのは、法務大臣だ。

他にも私伊吹整一を含め十五人が会議に参加していた。

「海軍長官それで反攻作戦は出来るのかね？」

「不可能です、せめて後一か月は待つて頂かないと」

「ですからそれでは国民の不満が・・・」

それから十分程経ち

「一旦休憩にしましよう」

会議が休憩になり私は、廊下に出た。

「お疲れのようですね」

「ああ、どいつもこいつも自分のことしか考えていない」

会議に出ているメンバーの半数はコネや賄賂で上がってきた連中だ。

特に財務大臣は酷い。

税金を上げるだけ上げて殆ど自分の派閥の懐に入れている。

「閣下は、國の為に尽力していると言うのに・・・」

「まあ少しずつ変えていくしかない」

本当に少しずつ変えていくしかない汚職の根は、想像以上に深い。

「そう言えば娘さんもう実戦に出られるんでしたつけ」

「そうだ、出来れば会いに行きたいが、なかなか難しい」

「やつぱり心配ですか？」

「確かに心配だが葉雪は、きっと生き残るよ」

国防省正門

憲兵が二人正門を警備していた。

そこに大型のバスが四台現れた。

憲兵が怪しいと思つていると中から一人白い髪と肌の女性が現れた。

「どおもここつて国防省であつてますか？」

「そうですけど何か御用ですか？」

「いえただ確認したつかつただけです」

「そうですか」

憲兵が怪しい女性だと思つていると。

パチンツ！

女性が指を鳴らしバスから大量の銃口が憲兵に向けられた。

憲兵が怯えていると女性が

「さようなら」

と言い大量の銃口から弾丸が発射された。

大量の弾丸で憲兵が蜂の巣になり女性が撃つのを辞めさせる。

「よし全員降りてきて」

バスからA K MやA K—47を持ち全身を野戦服と防弾チョッキ
顔をヘルメットとガスマスクで覆う軍隊の様な集団が出て来た。

休憩が終わり会議を再開しようとしたその時。

「大変です！」

会議室のドアを開け一人の憲兵が会議室に入つて來た。

「何事だ会議中だぞ！」

陸軍長官が声を荒げる。

「この建物が攻撃されています！」

その瞬間全員が驚愕した。

「敵は一体何だ深海棲艦か！」

「戦闘中の部隊の報告によれば正体不明の武装勢力との事です」

「何が起きているんだ」

国防省一階では、憲兵と職員達が拳銃やマシンガンを使い応戦していた。

しかし

「くそ何で死なねえんだ！」

敵は銃弾を当ても傷などないかの様に歩き銃を撃ち頭がもげても進撃して来る。

「くそ」

「ぐわ！」

憲兵達はなすすべなく蹂躪された。

白い髪の女性は、不敵な笑みを浮かべ今度は自分が突つこんでいく。

「きたぞ撃て！」

多数の銃弾が女性に向かうが全てを躲し憲兵にA K—12で銃撃する。

「ぐふ！」

倒れたのを確認したらすぐに別方向の憲兵に銃撃し殺す。

「陸戦も楽しいなあ」

ピーピーピー

女性のポケットに入っていた携帯電話がなり女性は携帯に出る。

『首尾はどうだ?』

わざと高くした様な声だつた。

「順調ですよ既に二階を制圧しました、後は三階に突入したら終わりです」

『あと数時間もすれば憲兵の増援がそちらに向かうだろうお前は、
部隊^{グル}を捨ててでも帰還しろ』

「部隊捨てちゃうんですか?」

『忘れるなこれは、実験にすぎない』

「はーい」

『油断するなよ』

「取り敢えず脱出を」

「そうだヘリポートまでのルートを確保するんだ」

こんな時まで自分優先か。

ドン！

「何の音だ！」

『恐らくヘリが爆破された音かと』

『どうするこのままじゃ全員ここで死ぬぞ』

「一つだけ状況を開ける手があります」

全員が私の方を向く。

「国防省の地下には脱出用の隠し通路が有ります」

「しかし地下までどうやつて行くんだ！」

「一階と二階は、敵に制圧されているんだぞ！」

「艦娘です」

「はあ？」

「私の護衛で一人の艦娘が付いてきています」

護衛を付けていて良かつた。

「残った憲兵達と合わせれば護衛くらいは出来るでしょう」

「艦娘で何とかなるのかね？」

「艦娘は、絶大な攻撃力と防御力を海の上でなくとも持っています」

魚雷は、使えないが艦娘は、陸でも強力な戦力なのだ。

「皆さん早く移動を」

まだ死ぬわけには行かない。

「長門、陸奥頼んだぞ」

「ああ提督任せてくれ」

「任せて頂戴」

「最悪一部の特に財務大臣は見捨ててでも生き残れ」

「分かっている」

無能な大臣の為に艦娘を失う訳には行かんのだ。

第九話

ドーン！

「吹き飛ばすか足を狙つて無力化しろ！」

長門が主砲を撃ちグールの対処方法を伝える。

「皆さん急いでください」

会議のメンバーは、長門と陸奥そして憲兵達に護衛されて地下を目指す。

「ぐはっ！」

「新手か」

別の通路を見ていた憲兵が撃ち殺され長門がそれに反応し撃ち返す。

「皆さんもう一つ階段を降りれば地下です」

一階までは、降りてこられたもののそれまでに多くの憲兵が亡くなり後は、憲兵隊長と数人であった。

「隊長階段まで後一直線二百メートルです」

「よし！皆さん我々が時間を稼ぎますその間に脱出してください」

「なつそれなら私も残る！」

長門が叫ぶ。

彼女は仲間を必ず死ぬ戦場に置いていきたくないのだ。

「長門駄目だ」

「しかし提督！」

「お前をまだ失う訳にはいかない！」

整一とて憲兵達を置いて行きたくはないしかし長門に今死なれては困るのだ。

長門は重要な戦力であり、失う事できない。

「行くぞ・・」

「くつ」

「長門行くわよ」

会議のメンバーと艦娘は、憲兵隊を残し地下に急いだ。

「隊長ほんとによかつたんですか？」

「は？何が」

「後一か月で退職だつたのに」

部下の一人が隊長に尋ねる。

「はつそんな事か」

隊長は部下の発言を鼻で笑う。
彼とて死にたくはないしかし

「役目を果たすそれが軍人だ」

彼には軍人としての誇りがあった。

「そりや野暮なこと聞きましたね」

「口を動かすよりさつさとバリケードに使える物持つて来い！」

「はっ」

隊員達が机や椅子などを搔き集め通路をバリケードで固め彼らは、絶望的な戦いに身を投じる。

「来ました！」

「よしまずはグレネードを投げろ！」

隊長の指示で隊員達がグレネードを投げグール達を吹き飛ばす。

「増援を確認！」

「ちつ数が多い！」

すぐに別のグールが殺到し銃撃して来る。

「くそ撃て撃て撃ちまくれ！」

隊員達はバリケード越しにグールの足を撃ち無力化していく。
しかし

ヒューン

ドン！

グールの一人がロケット弾を撃ち込みバリケードを破壊する。

「くそロケット弾か」

「たつ隊長・・・」

「おい山崎！」

隊長がさつきまで話していた隊員はロケット弾によつて下半身が吹き飛ばされていた。

「隊長・・・」

「もういい喋るな」

「今まで・・・ありが・・・」

ドン！

隊員最後まで言う前に隊員は突然の銃撃で死んでしまつた。

「つー！」

隊長が驚いていると硝煙の中から白い女が出て來た。

「いやー吸血鬼の目は、やつぱりいいですね確實に頭を撃ち抜ける」

「おつお前ーー！」

隊長が激高して女を撃とうとした時

ガップツ！

女は隊長の首元に噛みついていた。

「つ！」

女は血を吸い隊長は、次第に力が入らなくなりやがて絶命した。

ピーピーピー

電話が鳴りそれに女は出る。

『そろそろ憲兵の増援が来る、撤収しろ』

『会議のメンバーまだ殺せてませんけど』

『撤収しろタ級』

「分かりましたよヲ級」

こうして 国防省襲撃は幕を閉じた。

二日前

「ホントニナンデモイウコトキイタラズツトイツショニイテクレル
?」

「うんほんとだよ」

「ヤツターハ！」

レ級は言う事を聞いてくれそうだ。

人は無理やり言う事を聞かせるより愛で縛つた方が裏切らないし
良い成果を残すのだ。

「テモナニスレバイイノ?」

レ級が困った顔をしながら首を傾げる。
ちよつと可愛いな。

「まず私と同じ吸血鬼になつてもらうよ」

「キユウケツキ?」

「まあなれば分かるよ」

「ツ！」

私はレ級の首に噛みついた。

レ級は吹雪に噛まれ少し戸惑いながらも吹雪を受け入れた。

「多分これでOK」

数分して吹雪はレ級から離れた。

「これで吸血鬼になれた？」

「うんなれたよ言葉も流暢になってるし牙も生えてる」

初めて吸血鬼化させてみたが上手くいって良かつた。

「これでずっと一緒に」

「まあすぐには無理だけどね」

「え？」

レ級が滅茶苦茶悲しい表情でこちらを見てくる。

「大丈夫レ級に手伝つてもらえればすぐに一緒になるから」

「本当・・」

「うん本当だよ」

「分かった」

レ級は涙を拭い頷く。

「何を手伝えばいいの？」

「じゃあまずはレ級の拠点に連れていくてくれるかな」

「うん！」

レ級は嬉しそうな表情で頷いた。

レ級に案内してもらい道中で自己紹介などをしていたら二人共吸血鬼ということもあり一時間程で着いた。

「あれがレ級の拠点にしてる島？」

「うん姫が管理してる」

姫と言う事は、姫級か少し面倒だな。

「レ級は、仲間を殺されたらどう思う？」

「弱い奴だなと思う」

「じゃあ問題ないね」

「何するの？」

「姫を殺す」

姫を殺さないと目的が達成出来ないし何より戦いたい。

「じゃあ私も吹雪と一緒に殺す」

「じゃ行こうか」

殺戮の始まりだ。

島の周りに居た深海棲艦を粗方かたづけ後は姫とその護衛だけになつた。

あれは泊地棲姫か。

「レキユウウラギッタナ！」

泊地棲姫が叫ぶ。

「うるさい」

レ級が砲撃する。

「グツ」

砲撃が泊地棲姫に命中し苦悶の声を上げる。

その間に私は、距離を詰め護衛を殺していく。
まずヲ級をM P 4 0で殺す。

ル級が二隻で砲撃していくがグレネードを投げ牽制しK a r 9 8 kに持ち替えた後二体とも頭を抜き殺した。

最後にヘ級が突撃してきたが銃剣で体を貫き殺す。

「オマエハイツタイナンナンダ！」

泊地棲姫が叫びながら艦載機と砲弾で攻撃していくが、艦載機を全て落とし一気に接近する。

「シズメ！」

泊地棲姫のパンチを避け首に噛みつく。

「ハナレロ！」

叫びながら攻撃していくが意に返さず血を吸う。

「ウツ」

左手で泊地棲姫の腹を刺し黙らせる。

別にこのまま噛み切れば殺せるが私がやりたのは、こいつを取り込む事だ。

第十話

数分して泊地棲姫の血を吸い切り、泊地棲姫は絶命した。

「よし」

しつかり吸収できたようだ。

泊地棲姫のあらゆる記憶が流れ込んでくる。

「吹雪そ^う言え^ば何でここに来たの？」

「んー簡単に言うと軍から失踪する為に自分だけの軍隊を作る為かな」

「どうやつて？」

「深海棲艦は、海底に沈んだ船や砂を材料として建造されるでしょ」

「そうだけど」

深海棲艦の作り方は、泊地棲姫の記憶で完全に分かつた。

「レ級この島にある死体と資材を建造ドックに集めてくれないかな？」

「分かつた！」

レ級は走つて資材を集めにいった。

恐らく私に必要とされる事が嬉しいのだろう。

「さて成功するかな?」

吹雪は歩き出し目的地の施設に向かう。
数分で着き施設を見る。

廃墟のような建物だつたが所々整備されていた。
中に入ると大きなプールの様な物が幾つかあつた。
水の色はどうす黒く禍々しい見た目をしている。
近くにはレ級が既に運び込んだ死体や資材が積み上げられていた。

「まずはやつてみるか」

吹雪は取り敢えず死体四つと幾つかの資材を入れる。
そして最後に手のひらをナイフで切る。
傷が付くが赤黒い影によつて瞬く間に塞がる。
そしてナイフに付着した自分の血を入れた。

「吹雪何してるの?」

レ級が資材を持つて戻つて來た。

「実験に近いけど私の眷属化した深海棲艦を作つてる」

正直言つて成功率は低い。

深海棲艦の建造方法は、分かつたが吸血鬼化するかは、分からない。

「そう言えば高速建造材つてある?」

ゲームであつた高速建造材が有れば直ぐに結果を見れる。

「あるよ」

レ級が持つて来た箱から火炎放射器の様な物を取り出した。

「貸して」

「はい」

レ級から高速建造材を受け取り、プールに放射する。
放射し終わり、プールが赤黒く光りだした。

「さあどうなるか」

プールから手が出て来て手摺を掴む。

「はあ・・はあ」

プールから白い肌の女が出て來た。

「お前は、何だ？」

女に問う。

「貴方の眷属です・・・」

「お前は何級だ？」

更に問う

「ヲ級です・」

「お前の好きな事は?」

一番重要な事を聞く。

「戦争です」

「パーエクトだ」

成功いや大成功だ。

眷属化だけでなく思考が私よりとは、本当にパーエクトだ。
しかしあの帽子の様な物含め艦装がないな、矢張り開発をしなければ駄目か。

と言うか

「服はどうした?」

「分かりません」

このヲ級何で裸なんだ。
服も用意しないと駄目か。

「取り敢えずこれを着ろ」

着ていたロングコートを渡す。

「するい」

レ級が殺気じみた目でヲ級を観ている。

「レ級艦装を作るから資材を持つて一緒に来てくれないかな?」

「はい!」

レ級は嬉しそうに返事し資材を持ち始めた。

単純な奴だな。

少し可愛い

隣の開発施設に移動する。

中には黒く巨大な機械が置いてあつた。

資材を入れる場所は、上に設置されており下の口の様な部分から装備が出て来る様だ。

レ級が資材と私の血が付いたナイフを持ち梯子を登ぼる。

「先ずは十分の一位入れて」

「分かった」

持つて来た資材と私の血をレ級が入れ機械が赤い光を放つ。

機械は直ぐに輝きを失い、下の口から装備が生み出される。

STG44が吐き出された。

「吹雪どうだつた?」

「大丈夫、成功だよ」

私の血を混ぜるとミレニアム装備になるのだろうか。
まあ装備出来れば良い。

「他も入れちゃつて」

レ級は次々と資材を入れた。
機械が何回も光り、幾つもの装備を創り出した。

「これは軍服か？」

何故か親衛隊士官の野戦服が出た。

「こつちは下士官の野戦服か」

色々と出た訳だが半分位が軍服だ。
装甲値でも上がるのだろうか。

「これはいいなアハトアハトだ」

8.8cm Pak 43 通称アハトアハト、ドイツ軍が開発した高射砲で威力が高すぎて対戦車用にも用いられた傑作兵器だ。

「対空も対艦も行える素晴らしい兵器だ」

「吹雪この航空機みたいのは?」

「それは、V1ロケット改だね」

V1ロケット、ドイツが開発したロケットでV1ロケット改は、ミニニアムが改造して誘導能力を付けたものだ。

「後これは、シュヴァルベか」

Me 262 シュヴァルベドイツ軍が開発した世界初の量産
ジェット戦闘機だ。

「レ級に上げるよ」

「ありがとう吹雪!」

後はパンツアーファウストとMP40とSTG44が、まあこんなところだろう。

「じゃあ戻ろうか」

「うん」

レ級と一緒に装備を持って建造ドックまで戻る。

「ヲ級これ着てね」

ヲ級に野戦服を渡す。

「分かりました」

「んーー」

レ級が恨めしい目で見てくる。

「レ級も着る?」

「うん! 着る」

ヲ級とレ級が野戦服に着替えている。

「吹雪は着ないの？」

「着てほしいの？」

「うん、出来れば着てほしい」

レ級がウルウルした目で見てくる。
こいつ可愛いな

「分かつた着るよ」

「やつたー」

私は親衛隊の士官服に着替えた。

着てみると意外と動きやすくアハトアハトも装備してみたが、吹雪
型の艦装に比べてしつくり来た。

「吹雪どうかな、にやつてる？」

「うん凄いにやつてるよレ級」

「そ・そうかな・・えへえへ」

レ級の照れている姿可愛いな

「吹雪も凄いかっこいいよ！」

「ありがとう」

今私はSS士官服を着て軍帽も被り、コートも羽織っている。

「もう一隻建造しておこうかな」

「どの位入れますか？」

ヲ級が尋ねてくる。

「まあ半分位入れちゃおうか」

「分かりました」

ヲ級は資材をどんどん入れていき私も血を入れる。

「高速建造材使つて」

「はい」

ヲ級が高速建造材を放射する。

「出来たかな？」

プールから腕が出て来た。

そしてヲ級の時と同じ様に手摺を使い上がつてくる。
白い髪に艦娘の様な服を着た女が出て来た。

「お前は何だ」

念の為ヲ級と同じように質問する。

「貴方の僕です」

「お前は何級だ

「私はタ級です」

第十一話

「タ級これを着て下さい」

「分かりました」

ヲ級がタ級に下士官服を渡す。

タ級は渡された服に直ぐに着替える。

「レ級」

「何？吹雪」

「私は戻らないといけないの」

「・・わかつた」

レ級は一瞬泣きかけたが直ぐに涙を引っ込め頷いた。

「よし、ヲ級」

「はい司令、何でしようか」

「君には此処の管理を任せると私の血を使って四肢のある深海棲艦とその装備を増産しておいてくれ」

「はつ了解しました」

「タ級は私についてこい」

「分かりました」

最低限の指示を出し私はタ級と海へ出た。

私はタ級と共に海に出て暫くしてある事に疑問を感じていた。

「何故だ？」

何故私は寂しさを感じているのだろうか。
拠点を離れてから私は寂しを感じていた。
今までこんなに寂しさを感じた事は無かつたのに。

「司令どうかしましたか？」

タ級が私に聞いてきた。
どうやら声に出ていたらしい。

「何故だか寂しさを感じて」

「成程」

「今まで寂しさ何て感じて来なかつたんだが」

タ級は少し考えた後何か思いついた様なリアクションをした。

「多分ですけどレ級ちゃんと離れたからじゃないですか」

「へ？」

不意打ちの様な発言に私は啞然としてしまう。

そんなまさか

私はレ級を利用してるだけで離れて寂しいはずがない。
・・はづだ。

でも思い返してみればレ級を何回も可愛いと思つた。

それにレ級の事を考へると胸が締め付けられるような痛みを感じる。

「私は・・」

「確定的に恋してますね、顔赤いですよ」

恋それしか説明が付かない。
もしかして私は本当に

「レ級に恋をしているのか？」

暫くして私は変装したタ級と共に闇市に着いた。

「おい闇商人」

「ん？ 何だお前さんか」

私は店頭で新聞を読んでいた闇商人を起こした。

「珍しいなお前さんがそんな美人さんを連れて来るのは」

闇商人は私の後ろに控えているタ級をみた。

一応顔も隠させているがスタイルなどから美人と判断したようだ。

「そんな事よりも取引だ」

「分かつたよそれで、買い取りか？それとも輸血袋か？」

闇商人こいつにはお互いマスクごしではあるが色々世話になつて
いる。

何せ輸血袋もカラコンもこいつが売つてくれたし深海棲艦の死体
も他より高く買つてくれる。

いつもなら死体を売るか血を買うかだが今日は違う。

「どれも違う」

「じゃあ何だ？」

「情報だ、この辺で大きいヤクザかマフィア半ぐれの拠点を教えてく
れ」

闇商人は新聞をしまい睨むように私を観てきた。

「・・そんな情報何に使う気だ？」

「答える必要があるか？」

「まあいい」

そう言ふと闇商人は店の奥に行き暫くして地図を取つて來た。

「金は百万だ」

「了解した」

私は懐から札束を取り出し地図と交換した。

「でかいところには丸を書いてある」

「ありがとう」

感謝を伝え私達はその場を後にした。

地図に丸されている一番近い場所に私達は着いた。

「こんな所で何するんですか？」

「ちょっとした実験をしようと思つてな」

「へー、私は何すればいいですか」

「取り敢えずあの門番を殺してくれ」

「分かりました」

そう言つてタ級は入り口を警備しているヤクザに近づいていく。

「ああーー何だ？てめーー」

ヤクザは懐から銃を取り出す。

「止まれ！」

銃を向けて警告するがタ級は止まらない。

「止まれって言つてんだろうが！」

バン！

ヤクザはタ級に銃を撃つがタ級は銃弾を躱してヤクザの首に噛みつく。

「ぐぎやあああーー」

ヤクザは叫び声を上げたが首を噛み切られ絶命した。

「ああ噛み切っちゃつたか」

「へ！駄目でした!?」

「まあ出来るだけ傷のない死体が必要だつたからね

「す・すいません！」

「いいよいよ的確に指示しなかつたのは私だから

「次からは気を付けます」

「そうしてくれ」

そして私達は建物の中に入った。

入つて早速若いヤクザがいた。

「何だてめえらどこかっ・・ぎやああー」

私は首に噉みつき血を吸う。

ある程度吸つたところで吸うのを止め離れる。するとヤクザは白目をむき肌も血の氣を失った。

「こんな風にグールを作るのが今回の目的だ」

「分かりました！」

タ級は元気そうに敬礼してから先に走つて行つてしまつた。

タ級の後を追い歩いていると。

「ハアハア・・ハアハア」

前の方から声が聞こえてきた。

「あれは？」

前に見えたのは息を切らしながら走つている筋肉質な男だつた。

「くそ！・・何んだあいつは・・ハアハア」

どうやら先行したタ級から逃げてきた様だ。

「小腹がすいたな」

深海棲艦の方が美味しいがまあ不味いわけでもないしこいつでいいか。

「……！……何だお前……まさかあいつの」

私は男が言い終わる前に襲い掛かつていた。

第十二話

「終わったか？」

「はい！制圧完了しました」

腹を満たした私は先行していたタ級に合流した。

「何体のグールを確保した？」

「結構人数が多かつたので大体二百体前後確保できました」
タ級の後ろには自我を失い歩く屍なり果てたヤクザ達が屯していった。

「それだけいればまあ問題ないか・・・」

一二百体もいれば例え丸腰とは言え目的を果たせるだろう。

「司令」

「ん？なんだ」

「実はもう一つ報告したい事が」

高価そうな絵画を指差した。

絵画には泥と血にまみれた戦場が描かれておりなかなかいい絵だと個人的には思った。

「あの絵画がどうかしたのか？」

「実は隠し部屋を発見しまして」

タ級はそう言うと絵を外した。

絵の外れた壁部分にはボタンがありタ級はそれを押した。
するとゴゴゴ！と言う音と共に壁が二つに分かれ大きな部屋が出
現した。

「これは」

部屋はガラスで区切られておりガラスの向こうには大量の武器弾薬や防弾チョッキ果てはロケットランチャーまであった。

「恐らく密造や闇取引で入手したものだと思います」

見た限り自動小銃だけでも三百丁前後はある。

グール全員に持たせれば成功率も上がるだろう。

「これは役に立ちそうだ」

「私も役に立つと思い報告したのですが・・・」

「どうした？」

タ級は申し訳なさそうな顔をしながら喋りだした。

「どうもガラスが強化ガラスみたいで・・しかも訳が分からぬ位硬くて、吸血鬼の身体能力でも突破できないんですよ」

「何だそんな事か」

吸血鬼の身体能力でも破れないガラス確かに厄介だが・・
「私にはこれがある」

私の右腕から赤黒い影があふれ出し何かの形を作っていく。

影は直ぐに形を定め私の右腕には大きなアハトアハトが出現した。

「初射撃と行こうか」

私はアハトアハトを強化ガラスに指向し
ドーン！

凄まじい轟音と共に8・8 cm砲弾がライフリングに沿つて砲口から発射された。

砲弾は厚さ数センチの強化ガラスを貫通し奥の壁に着弾し。

強化ガラスは一か所の大きな穴からひびが広がりやがて崩壊した。
「タ級！ここにある銃火器でグールどもを武装させろ！」

すぐさまタ級に指示を出す。

「了解しました！あつでも一体グールで何をするんですか？」

「そう言えばまだ説明していなかつたな。

ちゃんと言つておくか。

「武装したグールの集団で国防省を襲撃する！」

「よし抜けられたな」

私はタ級に指示を出し終え朝にならない内に鎮守府に戻つてきていた。

今は鎮守府の警備を抜け艦娘の寮に戻る途中だ。

「よし後は部屋に行くだけだな」

寮の建物に入つた寮の中は警備が薄いから後はベットに入るだけだ。

少し歩き自分達の部屋の前まで来た。

後はゆっくりドアを開けて・・

「吹雪ちゃんっぽい？」

「つ!？」

急いで振り返る。

そこには夕立がいた。

「吹雪ちゃんは何でこんな時間に部屋を出てるっぽい？」

「夕立ちやんこそ何でこんな時間に・・・」

不味い。

まさか夕立に発見されるとは・・

油断していた。

今は午前三時こんな時間に外出していたとばれれば警戒されるどころか四六時中監視される危険性もある。

どうすれば・・

夕立、彼女にとつて吹雪は普通の親友・・だつた。

しかし航海訓練でのあの出来事。

目の前で深海棲艦の艦隊を蹂躪するさま見てから彼女の吹雪へ向ける感情は歪に変化していた。

私もあんな風に戦つてみたいそんな憧れの感情。

敵を蹂躪して痛めつけて殺してみたいそんな昔から抑え込んできた感情。

残虐な事をしたいと思っている自分が怖い、あんな残虐な戦いが出来る親友が怖いそんな恐怖の感情。

数日前までは恐怖の感情が勝っていた。

しかし最近は憧れと自分の残虐性が勝つてきている。

だからそんな残虐性を収めるために今日は寮を抜け出し虫を殺したり魚を切り刻んだりする事で抑えようとした。

だが部屋に戻る時にであつてしまつたのだ。

頬に少量の血を付けた吹雪に

「夕立ちやんこの事はまた内緒にして欲しいんだけど無理かな？」
とにかく前と同じように秘密にして貰わなければ。

夕立はそんな吹雪の言葉に葛藤していた。

寮を抜け出していた上に頬には血を付けている明らかに教官に報告するべき案件だ。

それに吹雪が何か犯罪を犯したのなら親友として止めなければならぬ。

しかし一方で吹雪に協力したらあんな風に戦う事が出来る様になるかもしれない。

あそこまでの動きが出来なくても少し位は教えてもらえるかもしれない。

夕立は悩んだ。

軍人としての責務と親友であることの責務を果たすか。
自分の感情と欲望を優先するかを。

夕立は数分悩みどちらを選ぶのか答えを出した。

夕立が押し黙つてからもう数分が経過した。
非常に重い雰囲気がこの空間を支配していた。

正直言つて気まずい。

ここはまた何か言うべきか？

それとも・・

「吹雪・・ちゃん」

夕立が遂に口を開いた。

しかしその表情は非常に重々しく汗が頬から滴り落ちていた。

「また・・内緒にして・・・あげるつぽい」

「本当?」

「でも!」

「つ!」

「その代わりに教えて欲しいつぽい!

あの戦い方を敵の殺し方を!」

夕立は選んだのだ。

自らの感情と欲望を・・・